

とんだ修羅場鎮守府に着ちまったもんだ

サンキューカッス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※修羅場を楽しむ短編です

※ギスギスした空気や浮気、不義理等が苦手な方にはお薦めいたしません

## 目次

とんだ修羅場鎮守府に着いてしまいました	1
とんだ修羅場鎮守府に着いてしまったものだね	25

とんだ修羅場鎮守府に着いてしまいました

「おはようございます！ ヒトフタマルマル！ 本時刻をもって駆逐艦・吹雪はトラック鎮守府に着任いたします！」

「ようこそ、我がトラック鎮守府へ。私は修羅道大佐だ、君の噂はかねがね聞いているよ。鎮守府一同、君の着任を歓迎するよ」

20×年、新春。

私の名は、駆逐艦吹雪という。この春、無事に艦娘としての訓練過程を全て修了し、晴れて一人前の軍人として鎮守府に配属されることとなったピカピカの1年生だ。

私が配属された先は、前線とは言えないがそこそこの戦果を上げている中規模の鎮守府だった。まだ1年目である事を考慮され、激戦区ではない鎮守府へと配置されたらしい。

「第六駆逐隊を君の引越しの手伝いにつけよう。明日から君の同僚だ、仲良くやり給え。荷物をほどこき終わったら、ヒトハチマルマルよ、食堂にてささやかながら君の歓迎会を予定をしている」

「ほ、本当ですか！ 光栄です、ありがとうございます」

配属された先で私を出迎えてくださったのは、新進気鋭の若手軍人、修羅道大佐と言った。彼はまだ若いと呼べる年齢だが、卓越した戦術眼が評価されてどんどんと昇進している海軍の出世株だそうだ。

「歓迎会では、積極的に他の艦娘に話しかけてほしい。命を懸けて戦う軍人にとって、信頼できる仲間こそ何より大切な宝物なのだから」

「……はい!! 拜命、了解いたしました！」

凄く有能だという噂だけ聞いてはいたが、実際に面と向かって話してみても良くわかる。

……この人は、有能なだけでなく、情に熱い良い提督だ。確固たる信念と、厳しくも誠実な人柄がよく伝わってくる。

それに。この提督、キリとした眼に筋の通った鼻筋、とこぞの俳優だと言われても納得できる美丈夫である。自信にあふれた表情は頼り甲斐を匂わせているし、短く清潔感のある髪型とガツシリと筋肉質な肉体からは何とも言えぬ男の色香が漂う。

上司であるのに、私は少々意識して赤面してしまった。  
イケメンで優しく誠実そうな提督……。

そんな事は起こり得ないとは分かっていたけれど、それでも少しアバンチュールを期待してしまうくらいは、仕方ないだろう。

さて、提督への挨拶を終えた私は、早速引越しの作業を行うことになった。

「暁型姉妹の長女にして1番艦、暁よ。困ったことがあれば言いなさい！ これでもお姉ちゃんなんだから！」

「2番艦、響。不死鳥の通り名があるよ」

「3番艦、雷よ！ かみなりじゃないわ、間違えないでよね」

「はわわ、電です。えっと、4番艦です」

イケメン提督に手を引かれ、これから君が暮らす場所だと案内されたのは、渋味を感じる木造建築の女子寮だった。

私達艦娘は全員この寮で生活し、提督を含めた男性の軍人は鎮守府で寝泊まりしているそうだ。これは、艦娘とはいえ年頃の女子、男性と同じ屋根の下はよろしくないと言う倫理観の下だとか。

寮の入り口には、四人揃って敬礼している少女達が目に映った。彼女達こそ、この鎮守府に所属する私と同じ駆逐級の艦娘、暁型の四姉妹らしい。

彼女達が私の先輩であり、そして戦友となる少女達。

「お初にお目にかかります！ 私は駆逐艦、吹雪といいます！ これからよろしくお願いします!!」

これから始まる新生活に、胸一杯に期待を膨らませながら。私は、

元気よくこの鎮守府の先輩達に頭を下げた。

引越し作業には、かなり時間がかかった。荷物を解き、並べ、ゴミを処分する。そんな単調な作業に、第六駆逐隊の先輩達は文句ひとつ言わず手伝ってくれた。

「困った時はお互い様よ！ 何でも私に頼りなさい！」

「あ、ありがとうございます！」

そういつて私に笑いかける、雷ちゃん。

彼女達は、快活で人懐っこい。仲良くなるのに、あまり時間はかからないだろう。

安心した。どうやら人間関係に困ることはなさそうだ。

そして時刻は、ヒトハチマルマル。私は仲良くなった暁型の四姉妹に、歓迎会の会場である食堂へと案内される。

そう。いよいよ私は、今からこの鎮守府の艦娘全員に目通りすることになる。念のため、服の皺を伸ばしたり髪を整えたりと、身嗜みを取り繕っておく。そんな緊張している私を見て、クスクスと彼女達は笑っていた。

あまり怖がる必要はないよ、みんな優しい艦娘達だ。そう、教えてくれた。

そうだ、彼女達に先に聞いておいた方が良いかも。私と共に戦う艦娘は、どの様な方なのか。名前を間違えるなんて失礼があつては、申し訳ない。

「この鎮守府には、どんな艦娘がいらつしやるのですか？」

「えっと、戦艦級が2隻、軽巡級が2隻、それと私達ね。残念ながら空母は居ないわ。提督さん、空母を回してもらえようずっと本部に要請してるらしいんだけど、どこも艦娘不足なんだって」

雷は、やれやれと小首を傾げる。

「敵に航空戦力が有れば凄く不利になるので、早めになんとかしてほしいのです……。ただ、戦艦級はあの有名な金剛さんと榛名さんがいるのです」

「軽巡級も、川内さんに神通さんと腕利き揃いよ。なまじつか強力な艦娘が集まっちゃったせいで、なかなか所属艦数を増やしてもらえないの」

「吹雪が来てくれて、本当に助かるわ！ ……資源の持ち帰りが楽になるし」

成る程。ここ以外にもたくさん鎮守府がある。戦力が均等になるように本部が振り分けた結果、残念ながら空母は配属されず、代わりに駆逐級である私が飛ばされた訳か。

聞くと、この鎮守府の戦力はカツカツらしい。本音を言えば空母が欲しかったのが実情なのだろうが、駆逐艦わたしが1隻配属されただけでも非常にありがたいそうだ。

——つまり、仕事には事欠かないのだろう。これから忙しい日々になりそうだ。でも、誰かに必要とされて働くことができるのは、とても素敵な事だと思う。

「吹雪。これから私達は戦友であり、家族なんだ」

やる気を新たにして拳を握りしめる私に、響は微笑んだ。

「まだ所属艦は少ないけど、私達の練度や連携力は全軍の中でもトップクラスだと思う。だから貴女も、これから仲良くしてほしい」

「ふふふ、困ったことがあれば何でも言いなさい！ この暁が解決してあげるわ！」

「遠慮なんかしないで良いのよ。私達だけじゃなく、金剛さんや榛名さんはとっても明るくて話しやすいの。川内さんは少しお調子ゆりで、神通さんは訓練の時だけ怖いけど、それでもみんなみんな優しいわ」

「電で良ければ、いつでもお話を聞くのです。これから、一緒に頑張りますよ」

ああ。

世にはブラック鎮守府なんて呼ばれて、艦娘が奴隷の如くこきつかわれるような場所も有るらしいのに、この鎮守府はどうだ。

第六駆逐隊の皆は、心から笑っている。

きつと、私が配属されたこの場所は。他のどこよりも温かく優しい素晴らしい所だ。

そう、確信した。

「神通ー？ その手を離しなサーイ？」

「……」

そして、扉を開いて入った食堂の中では。

先程の話題にあつた艦娘、神通と金剛が二人向き合つてメンチを切り合つていた。

その間には、提督が居心地悪そうに座っている。二人に挟まれる形で、ダラダラと汗を流しながら提督は、睨み合う艦娘二人をオロオロと見つめていた。

「……あれ、何ですか？」

「はわわ、喧嘩なのです」

おかしいな。聞いていた話と違う。

この鎮守府は、みんな仲が良いのでは無かったのか？

軽巡神通は無言で提督の肩を抱きながら金剛を睨み付け、戦艦金剛はワナワナと手を震わせながら神通を威嚇している。

どうみても、殴り合いの一手手前だ。

「え、何？ 何なの、これ？」

「あちゃー……、よりによって今日か」

「響、何か知っているの!？」

どうやら、場の状況が理解できないのは私だけではないらしい。雷や電、暁も目を白黒とさせて混乱している。

険悪な状況の食堂へと足を踏み入れて落ち着いているのは、暁型の次女、響だけだった。

「説明しよう。実は、ウチの提督はモテモテだったんだ！」

「な、何だってー!」

ドヤ、と口元を歪める響。思わず反応してしまったが、あの二人の様子を見ればその程度は想像がつく。

つまり、修羅場なのだろう。

「ウチの提督は無駄にルックスが良い。頭も切れて、頼りにもなる。そうなると、艦娘の中から提督に懸想する者が現れるのも当然の帰結なんだ。私達の中でも、雷なんかは良く寝言で提督の話題が出る」

「へっ……ちよつとおおお!? な、何を言ってるのよ響はああ!？」

「雷お姉ちゃん、電もよく聞くのです。『提督、もっと私に甘えて良いのよ……』みたいな寝言なのです。たまに起こされるので勘弁して欲しいのです」

「い、いやああああ!!」

響ちゃんの解説の流れ弾で、雷ちゃんが無駄なダメージを受けていた。だが、今はそれは重要ではない。

「つまり。金剛さんも神通さんも、密かに提督に思いを寄せていたけれど、今まではそれを上手く隠して仲良くやっていた」

「それが、たまたま今日のこのタイミングで爆発してしまったと」「なんてことだ」

実に迷惑な話である。

確かにあの提督は、整った顔立ちで大変見目麗しい。私も、グツと来る色気を感じた。ひよつとして、みたいな期待もした。

だけど、そんな修羅場イベントをよりによって配属初日に起こされてはたまらない。ただでさえ目立ちにくいのに、更に影が薄くなってしまう。

「……せつかく私の歓迎会なのに。普段は平凡で目立たない私が、主役になれる数少ない日なのにー」

「御愁傷様」

まさに、出端をくじかれた気分だ。せつかくの新天地で、やる気も十分だったのに。

「お、おお！ 吹雪、来たか。では、席についてくれ二人とも。これよ、彼女の歓迎会を始める」

提督は、食堂へと現れた私達を見て破顔した。修羅場から抜け出す機会をうかがっていた様だ。私をダシに逃げないで欲しい。

提督の言葉を聞いた神通と金剛は、お互いに睨みあつた後するりとその場を離れ、それぞれが席についた。良かった、流石にお二人とも一応TPOは弁えているようだ。

ただ、二人の顔は険しいまま、じい、と互いを睨み続けているけれど。

「……あー、諸君。喜ばしい事に本日、我々に新たに、共に命を預けることのできる仲間が増えた。すまない、吹雪、自己紹介を頼む」

「あ、はい」

こんな険悪なムードの中、私に自己紹介を振る提督。少々無責任ではないだろうか、もうちよいと場を温めてから……

いや、提督さんとしても何とか空気を変えようと試行錯誤しているのだろうか。

「吹雪型一番艦、駆逐艦吹雪です。まだまだ未熟ですが、情熱は負けません。よろしくお願ひいたします」

とは言え、私に場を盛り上げるジョークの類は持ち合わせていない。無難に平凡に自己紹介を終えた私は、おとなしく近くの円形テ

ブル席へと腰を下ろした。

間違っても、提督の座っている隣に用意されたお誕生日席には向かわない。多分私のために用意された席なんだろうけど、わざわざ修羅場の爆心地に向かう程バカじゃない。

「うむ、期待している。さて、彼女の自己紹介は終わった。では、今度是我々が彼女に名乗りを返す番だろう。第六駆逐隊は良いから、軽巡から自己紹介を頼む」

「……はい」

提督も私とその席を敬遠している事を察してくれたようで、私をお誕生日席へと誘導はしなかった。駆逐艦達に用意されたであろうお菓子多めのテーブルに、第六駆逐隊のみんなと共に着席する。

そして提督に自己紹介を振られ、最初に席を立った軽巡洋艦は先程まで提督に抱き付いていた神通だ。大人しそうな雰囲気とは裏腹に、先程まで熱く提督を取り合っていた艦娘である。

「川内型二番艦、神通と言います。貴女の指導教官も兼ねているわ、これからよろしくね吹雪さん。それと——」

そんな神通さんはニコニコと笑顔を張り付け、私に手を振ってくれた。良かった、いい人そうだ。

提督の件は置いておいて、私を歓迎する事を優先してくれたのもありがたい。TPOを弁えられる性格のようだ。良かった、せめてこの歓迎会の間くらいは醜い言い争いはやめてほしいものだ——

「——私は、提督とは交際関係にありますので。吹雪さんも、弁えてくださいね？」

「よくぞ吠えマシたね、こーのサノバビッチがあ!! 良い度胸デース!!」

うわーい。

神通の挑発的な自己紹介を受けて、戦艦金剛は目の色を変え席を立ち上がった。そして自己紹介の最中だと言うのに我を忘れ、神通目掛

けて突進し殴りかかる。

無論、神通とて棒立ちではない。神通は、金剛の拳を避けてくるりと受身を取り、静かに構えをとった。完全に臨戦態勢である。

血管を額に浮かべた金剛は、拳がスカつて叩き割った椅子の残骸に目もくれず、ドロリと濁った目で神通を睨み付ける。

ウゴゴ、さつきよりさらに雰囲気が悪くなった。

「へーイ、さつきからちいっとばかり調子にのってマセンか、神通ウー？」

「……そう言うことなので、金剛さんは諦めてください」

「オー？ オオー？ 良いデスよー、その喧嘩買いマース」

一触即発。立ち上がったメンチを切りあい、鬼気迫る笑顔で額と額を突き合わせている金剛、神通。

なるほど、笑顔とは本来攻撃的なモノだと聞いたことがあるが、今初めてそれが理解できた。あんなに恐ろしい笑顔は生まれて初めて見た。

「落ち着いてお姉様！」

「神通、ストップ、ストオオップ!!」

その凍り付いた空気の中、慌てて割って入ったのは彼女達の姉妹艦だ。川内は神通の肩を抱き、榛名は金剛の腰に組み付いて、両者を引き離す。

「榛名、離しなサーイ。彼処にいる淫乱ビイイツチに、正義の鉄槌を……」

「川内姉さん、大丈夫です。私は冷静です」

そんな、姉妹の決死の仲裁によりなんとか喧嘩への発展は阻止された。だけど、場はこれ以上ないと言うほどに険悪になっている。

第六駆逐隊は、みんな顔を真っ青にしてオロオロしているだけ。

……私の歓迎会なのに、私が完全に置いてけぼりじゃないか。文句を言いたくなってきたぞ。今文句を言ったら場の空気が更に悪くなりそうなのでおとなしくするけど。

「ちよつと、酷いわね神通さんに金剛さん。こんなの、吹雪がかわいそうじゃない」

「……そうね。響、いつもみたいにくぎつけて何とかしなさいよ。笑いとるの、私達姉妹で一番うまいでしょ」

「私は芸人じゃない。それに、今は何やっても滑る場だ」

「滑るといふか、場が凍り付いちやうのです。……よしよし、元気出しますので吹雪さん」

それに比べて、第六駆逐隊の面々はなんと温かいことか。神通さんや金剛さんに対する評価が駄々下がりする一方で、この同僚たちへの親愛の念がどんどん高まってくる。この鎮守府に来て一番の収穫は、彼女たちとの出会いかもしれない。

というか、提督さんがこの場を仲裁してくれよ。アンタが原因でしようが。

「良いこと教えてあげマース、神通ウー？ 私は提督と、既に恋仲なんデスヨー？ 何度も何度もベッドインしてマース」

「……つちよ、ちよつとお姉様!!? 駆逐艦がいる前で何てこと言い出すんですか!!」

「貴女は知らないでショーけど、提督の身体は、硬くて凜々シクて、それでイテあったかくて……」

「お姉様ストップ!! 教育に悪い!! それ以上は駆逐艦に聞かしちゃダメな奴ですって!!」

お、おわあ。

「は、はわわわわわわわわ」

おお、電ちゃんが目をクルクル回し赤面している。かくいう私もそうだ。あの提督、艦娘に手を出してるのか。

いや、確かに艦娘との恋愛は禁止されてない。でもそれやっちゃうと、大概は鎮守府が修羅場になって空気崩壊するからどこの提督も敬遠しているのに。

「そんな嘘、ついても空しいだけですよ。だって、私こそが提督と契りを結んでいるのですから」

「神通ううう!! ちょ、乗せられるなバカ、冷静になれ!!」

「黙ってて、姉さん。そんなこと言われたら流石に黙っていられない」

お、おお?..

あれ。これってまさか、ひよつとして。

「ね、ねえ、あの二人の言ってること食い違ってない?」

「……すばしーば」

「すばしーば、じゃないのです! はわわわわ、どっちが嘘ついているのですか!?!」

「ねえ、ベツトインとか契りとかって、何の事なのよ」

「暁そのままの君で居てくれ。うん、響が思うに金剛さんも神通さんも、どっちも嘘をついてないんじゃないかな?..」

どっちも嘘をついていない、ねえ。

ああ、そんな気がする。だって、提督の額から滝のように汗が流れているじゃないか。あれってつまり、そういう事だよな。

「へい提督!! バシつと真実を告げてください!!」

「提督。嘘を言っているのは金剛さんでしょうか? ね?..」

その問いに、顔を蒼白にした提督は。

「……zzzz」

寝たふりをして誤魔化そうとしていた。

「……提督さん？」

「どうしマシタかー？」

睨み合っていた二人の目から、ハイライトが消えうせる。

ああ。やりやがった、あの男。鎮守府で、艦娘を指揮を執るものとして一番やつちやいけないことをやりやがった。

アイツ、二股かけてやがった。

「起きろ」

金剛、神通の二人は、信じられないくらい低い声で提督を起こす。

汗をタラタラと流しながら、非常にゆっくりと顔を上げた提督は、頬を引きつらせながらニコリと笑った。

「何がオカシイ？」

その、不器用に笑った提督の頬をパチンと叩く、戦艦金剛。

「質問に答えてください」

逆方向から、同じ様にビンタで頬を張る軽巡神通。

「提督の恋人は私ですよ」デスネー？」

凍てつく波動を放ちながら這い寄る二人のうら若き女性を前に、両の頬を赤く腫らした提督は、手のひらを口元で隠し静かに返答した。

「……さ、さあどうだったかな？」

「めっちゃ目が泳いでる!! やっぱ二股してやがるぞアイツ!!」

思わず叫んでしまった私は悪くないだろう。

何やってんだあの畜生。女だらけの職場で、たった一人の男が二股かけたらどうなるかくらい考えなかったのか。

「そ、そんな、嘘よ」

「大変なのです！ 密かに提督に片想いしていた雷お姉ちゃんが大ショックを受けているのです！」

「暁、早くなくさめるんだ。今こそ、暁のレディ力りよくの見せ所だ」

「え、私!? ……分かったわ、レディな私に任せなさい！」

そして、やはり雷ちゃんが流れ弾に被弾して重傷を負っていた。

いたいけな駆逐艦をも傷つけるとは、許せん。

「……はあ。こうなつたらもう仕方がないか。吹雪はコツソリと部屋に戻つて休んでいたほうがいい」

「い、いいのかな？」

「私がそう勧めたことにする。ごめんね吹雪、本当は響はこの事を知つてたんだ」

響ちゃんは、そう言うとペコリと頭を下げた。

「知っていた？」

「うん。私は、眠れない夜は一人屋上でウオツカを嗜む癖があつてね」「未成年飲酒!？」

「艦娘は未成年とか関係ない。そもそも響という駆逐艦は、艦船時代の実働期間を考えたら余裕でお酒が飲める年齢さ」

響ちゃんはそういうと、ニヒルに笑つてセーラー服の襟元から小さなウオツカの小瓶を取り出した。

「ちびり、ちびりと月を着に飲むウオツカはオツなもんさ。で、女子寮の屋上で飲んでいると、コツソリ抜け出して提督の部屋に行く艦娘の姿が丸見えなんだ」

「……じゃ、じゃあ」

「金剛さん、神通さんの二人共、提督の部屋に歩いていくのを見たことがある。だから、そういうことなんだらうなと察してはいた」

「はわわ、響お姉ちゃんが何か大人びた表情をしているのです」

そこまで言うとな彼女は目を伏せ、ウオツカの蓋を回して開ける。むわつと、嗅いだことのない科学的な異臭がその場に漂う。

「失礼、んぐんぐ、ぷはっ。喉が焼けそうだ」

「ほ、本作品は未成年への飲酒を勧めるものではないのです！ 良識のある皆さんは、お酒を嗜むのは20歳からなのです！」

「私はセーフだってば。さて、話を戻すとこの修羅場はもう血が流れるまで行き着かないと解決は難しいだろう。……で、だ。この場を解決するのに、響にいい考えがある」

「ひ、響ちゃん!？」

ウオツカを飲んで少し頬を赤く染めた響は、何でもないことのように

にそう言った。この修羅場を、あっさり解決してみせると。

「ひ、響！ 何をするつもりよアンタ!!」

「……言ったらろう？ 私は前々からこの事を知ってたのさ、対策くらい考えているに決まってるだろう」

響はそう言うと、再び静かにウオツカの瓶に口をつける。そして、僅かに酒を口に含んだまま、こう続けた。

「じゃ、行ってくる。吹雪は、巻き込まれたくないなら部屋に帰っていて。ドロドロしたのが好きなら、野次馬根性で見物しているといい。吹雪の歓迎会でこんな乱痴気騒ぎになってるんだ、失礼なのはこっちさ。だから、この騒ぎから逃げるなり、面白おかしく眺めるなり、吹雪の好きにしたらいいよ」

「ひ、響ちゃん」

そういうと、彼女は私たちに背を向けて。

片手を上げて振り向かず、金剛と神通がにらみ合う空間のと真ん中へと、足を進めた。

何をするつもりなのか。一体どんな魔法を使えば、この場を収めることができるのか。

部屋に戻れ、と響ちゃんに言われたけれど。彼女がどんな事を仕出かすつもりなのか気がなった。響ちゃんが心配なのもあり、私はこの場に残る事にする。

一体、何が始まるというのだろう。

「金剛さん、神通教官。二人共、聞いて欲しいことがあるんだ」

そして響ちゃんは、一触即発の二人の背後から落ち着いた声で話しかけた。

猛獣を刺激しないよう、恐る恐る。

「……響ガール、ゴメンナサーイ。今は、貴女のジョークに付き合っている余裕は……」

「私ね、榛名さんも深夜にこっそりと提督の部屋に入っていったの見たよ」

「えっ!?!」

「ワッツ!?!」

……響ちゃん？ アンタは何を言い出しているの？

「そ、そのジョークはいつものキレがありマセンネー。ジョークの腕が落ちてますよ、響ガール？」

「そそそそうですよ！ わ、私がお姉様に内緒でこっそりなんてそんなこと有り得ません——」

「てか、昨日見たよ。金剛さん、昨日の夜、榛名さんは部屋に居たかな？」

響ちゃんは淡々と、金剛さんを見つめてのたまった。いきなり榛名さんに矛先を向けて、何が狙いなのだろう。場がさらに混沌としただけじゃないか……。

それに、いくらあの提督でもそれは駄目だと分かってる筈。だから、榛名さんについてはきつと響ちゃんの嘘——

「提督ウー？ 勿論、榛名とはなんともないですよネー？」

「そ、そんな気がする様な、気がしない様な？」

「この野郎、まーた目が泳いでやがる!!」

また、思わず突っ込んでしまった。

3股ってマジかお前。しかも、手を出した艦娘の妹が浮気相手って、マジかお前。

「……榛名ー？ どういう事デース？」

「はあー、響ちゃん。どうしてそれをバラしちゃうんですか……」

「OUCK!! この裏切り者、貴女は私と提督が恋仲であること知ってたでショー!! 何で、一体どういうことデース!?!」

金剛さんは目の色を変えて、一転し榛名さんの胸倉をつかみ上げた。一方で榛名さんかというと、落ち着き払った顔のまま、ふうとため息を吐く。

「……謝りませんよ、お姉様。榛名は、確かにお姉様に恋人の座を譲りました。でも、私だって提督のことが好きだったんですよ？ 一番はお姉様でいい、ただ、自分の心に嘘をつきたくなかっただけ」

「それは、泥棒猫の言い草デース!! 貴女も提督が好きなら、正面から告白すれば良かったデショー!!」

「正面から告白しましたよ？ お姉様とのコトが終わったあと、入れ替わるように提督の部屋に夜這いに行つて」

「こ、このファツキンビッチ!! は、榛名は味方だと信じてマシタのにー!!」

榛名さんの様子が変わる。目が据わり、ニヤリと醜悪な笑みをこぼす彼女は、小悪魔だとかそんな次元じゃない凄みを感じた。

なんだアレ。思わず恐怖で後ずさっちゃったじゃないか。

「びえええん!!」

「とうとう雷ちゃんが泣き崩れた!」

「ど、どどどどうしましょう？ はわわ、暁お姉ちゃん何とかして欲しいのです!」

「ま、また私!? あーもう、泣き止みなさい雷!」

私達のテーブルでは、口論の流れ弾がすべてクリティカルヒットしていた雷ちゃんが、遂に大声を上げて泣き崩れる。惚れていた相手が人間の屑だったショックと、失恋のショックと、豹変した榛名さんに対するショックで彼女のメンタルがキャパシティオーバーを起こしたのだろう。

……だが、響ちゃんの悪行はこれで終わらない。彼女は飄々とした表情のまま、今度はトテトテと頬をヒクつかせている川内さんの方へ歩み寄つた。

「それだけじゃないんだ。ねえ、さつき一瞬焦つた顔をした川内教官?」

「……えっ？ ね、姉さん?」

そして、響は川内さんを指さして。口元を歪めて、神通さんに向き合つて告げる。

「川内教官も、提督の部屋に行つてたよね？ 一番回数は少なかったと思うけど」

「……っ!!」

そう。

響ちゃんは、オマケとばかりに川内さんの秘密も暴露してしまいがつたのだ。

神通さんは、濁り切った目で川内さんを睨みつけた。その目には、明確な敵意が浮かぶ。

その後。妹に威圧された川内さんがとった行動は、なんとポロポロと大粒の涙を流すことだった。

「違うの、私、神通を裏切るつもりはなくて……。ただ、ただ提督に夜戦があるからって部屋に呼び出されて、緊急出撃かなって部屋に入ったら、それで」

顔を覆って泣き出した川内さんは、震えた声で全てを語り出した。その意外な行動に、神通さんは目を丸くして硬直してしまう。

そして、川内さんの自白が始まった。

「ね、姉さん……？」

「ごめん、私も神通と姉妹だからさ、ホントは少し提督の事気になって。緊急出撃と思つて部屋に入ったらさ、すぐ押し倒されて。神通には内緒にしろつて、お前の気持ちには気づいてるから、神通に内緒で応えてやるつて。それで、私、拒みきれなくて——」

「ね、姉さん!!」

な。な。なんて下衆な!! 何で酷い、何て非道な!!

騙して部屋に呼び出したあげく、川内さんの秘めたる想いにつけこんで肉体関係迫るつて、アンタ、アンタ!!

「きゆう……」

「い、雷ーっ!?!」

「はわわ、ついに雷お姉ちゃんが気を失ってしまったのです」

とうとう、雷ちゃんがショックで失神した。だが今はそれどころではない。

つ、作り話だよね。さ、流星の流星に提督さんも、そこま下卑た男じゃないよね……?」

こ、これが事実だとしたら擁護できないどころか、今すぐ火あぶりにされても文句が言えない鬼畜の所業だ。嘘だよね、嘘だと言つてくれ提督——

「今の話は、本当デスカー?」

「ほ、本当である可能性が、微粒子レベルで存在しないとも言い切れな

い様な?」

「クソ提督じゃないか!!」

金剛さんに事実確認され、答える提督の目は、泳ぎに泳いでいた。

「クソ提督じゃないか!!」

「何で2回言ったのです?」

「え、えっと、川内さんは何で泣き出しちゃったの!? 拒みきれないって何の話なの!?!」

「暁お姉ちゃんはそのままの君でいて欲しいのです! それより響お姉ちゃん、何やってるのですか!! これじゃ場を荒らしただけなのです!」

提督のほぼ白白に近い返答により、場は更にヒートアップした。提督の胸倉をつかみ上げる金剛さん、流石にドン引きしている榛名さん、大粒の涙をこぼし謝る川内さんと、何とも言えぬ表情で姉を抱きしめる神通さん。

地獄絵図かな?

「ただいま、戻ってきたよ」

ひよっこりと。白髪の駆逐艦が、どや顔で私の目の前に現れる。

この地獄絵図を作り上げた張本人が、やり遂げた顔で私たちのテーブルに戻ってきやがった。

「響ちゃん何やってるの、何でわざわざ火に油注いでるの!?!」

「響お姉ちゃん!! こ、これどう收拾つけるつもりなのですか!!」

「おや、分からなかったかい」

私と電ちゃんに問い詰められた響ちゃんは、キョトンと意外そうな顔をする。

なんと彼女、悪気がないらしい。

「吹雪、貴女には申し訳ないとは思うけど。私は今日の歓迎会をぶっ潰して、爆弾を全て処理したかったのさ」

「ば、爆弾?」

「そうさ、爆弾。今日、神通さんと金剛さんの二股だけで話が終わっちゃったら、後々榛名さんや川内さんの件が明るみになった時にもう一度こういう事になる。だったら今日、全てぶちまけた方が一度の爆

発で済む」

そして響ちゃんは、至極真面目な顔でそう答えた。どうやら彼女は悪ふざけや悪戯で、場をかき乱したわけではないようだ。

「吹雪の歓迎会は、後日改めて行うように提督に言っておくよ。……今日は、この鎮守府に眠っていた巨大な時限爆弾の処理を優先させてもらった。いつかこうなる日が来て、こうする必要があったから」

「は、はわわ。響お姉ちゃんがすごく大人びた顔をしているのです」「な、成る程。でも、今のこの場を上手く収めないと、最悪死人が出るような……」

「そうだね、だから響はもう一仕事して来るよ。爆弾はすべて起爆した。残った仕事は、死人が出ない様に場を収めるだけさ。後は仕上げをご覧じろってね」

……そう言って、くるりと響ちゃんは私達に背を向けた。親指を突き立てて再び修羅場へと向かっていく彼女は、私からはとても大人びて見えた。

同じ駆逐艦のはずなのに、響ちゃんのあの落ち着きぶりなんなのだろう。この修羅場に右往左往していた私に比べ、この大惨事を解決しようとしている彼女のなんと頼もしいことか。

そこまで言うのであれば、見せてもらおう。彼女の、頭で描いているこの修羅場の終着点を。

「神通、ゴメンね、私、私……」

「せ、川内姉さんは悪くないです。その、えっと」

「少々浮気っぽいのは玉に瑕ですが、私はそんな提督を許容しますよ。榛名は大丈夫です」

「へーい、ドサクサにまぎれて提督にすり寄るのをやめなサーイ、フアッキン愚妹めが……」

4人の提督被害者たちは、お互いを罵り、謝り、慰め、怒鳴りあっている。当の提督本人は、必死で4人から目をそらして成り行きを見守っているだけ。

そんな状況に、駆逐艦・響はたった一人で突っ込んでいった。

「提督のしたことは許せないと思うけど、このまま罵り合っても何も

始まらないし何も終わらない。だからみんな、少し聞いてほしい。私に提案があるんだ」

その言葉で、周囲から響ちゃんに注目が集まる。いよいよ、始まるようだ。

「まず、みんなに聞こう。気にはならないかい？ 提督にとっての本命は誰だったのか」

そして彼女がそう皆に問いかけて、しーんと場に静寂が訪れた。

「提督は浮気野郎だが、最初から浮気野郎だったわけじゃない。一番最初に付き合った艦娘とは、まぎれもなく1対1の恋人だった筈だ。だから、最初に提督と恋仲になった艦娘が一番の被害者だと思わないかい？ その艦娘さんがリーダーとなって、提督の処罰を決めるのさ」

響は、そんな提案をした。一瞬意味が分からなかったが、すぐに私は響ちゃんの狙いに気付いた。

そうか。4人の艦娘が、4人それぞれの主張を言い合うだけだから、場が収まらないんだ。

議論を円滑に進めるには、議長が必要。響ちゃんは、暫定的に場のリーダーを決めることにより、この修羅場を終焉に向かわせようとしてるんだ。

「そ、それは……」

「言いたいことは分かるよ、榛名さん。貴女は金剛さんの後から付き合ったことは分かり切ってる。でも、元々付き合っていた金剛さんの方が裏切られたショックが大きい筈なのもわかるよね？」

成程これは、妙手かもしれない。と、言うか唯一の場を収める方法かも。

議長を置くにしても部外者である響ちゃんが場を仕切るより、当事者4人の中から1人のリーダーを選び、進行させる方が良い。被害者は、まぎれもなく彼女達なのだから。

ただ、誰を議長に選ぶかを決めるのが難しい。そこで、響ちゃんは絶対的な基準を設けたのだ。

それが、提督の最初の恋人。

「そう。提督が初めて付き合った艦娘……、その人が一番の被害者だ。だから、彼女に処罰を決めてもらい、納得いかなかったら二番目の艦娘が新たな処罰を言い渡す。何にせよ、場の主導者が居ればいずれこの修羅場も収束するって話さ」

「……確かに、このままじゃ落ちが明かない。私が提督の初めてじゃなかったとしても、川内姉さんの事も含めてしつかり落とし前をつけてもらえるなら、その提案に乗るわ」

「……良いでショウ、確かに提督のファーストは誰なのか、気になりマース」

すんなりと、響ちゃんの提案は受け入れられる。

本音を言えば、彼女たちはそれぞれ提督に対し思うところがあるのだろう。だが、それではいつまでも場がまとまらない。自分達が見苦しく言い合っている自覚もあるのだろう。

だから、彼女達は提案に乗ったのだ。大人として、いつまでもギヤアギヤ騒ぐだけでは恥ずかしいだけだから。

「じゃ、聞こうか。提督、初めて付き合った艦娘は、どの娘なんだい？」

そして、この場を代表して、響が提督に質問した。

「……です」

「聞こえないよ、提督。もっと大きな声で言って」

提督は、答えをボソリとつぶやいたせいでよく聞こえない。

でも、これできつとこの事件も解決するはずだ。金剛さんか神通さんか、どちらが最初の恋人かは分からないけれど。議長が居ればそれでやっつと――

「俺が最初に手を出したのは……、駆逐艦響です……」

「そーだよー」

バリン、と何かが割れる音がした。

音の出どころは一目瞭然だ。響ちゃんが持っていたウオツカの小瓶が、彼女の手の手で粉々に砕け散っているからだ。

今まで飄々と修羅場の仲裁をしていた響ちゃんの目から、ハイライトがすうーと消え去っていく。

「響だよね。提督の最初の恋人は」

「え、その、ハイ」

「私ね、全部知ってたんだよ？ 神通さんに夜這いされてあっさり受け入れたのも。金剛さんに迫られて関係を持ちちゃったのも。だってその日、両方とも響は提督の部屋の前で立って聞いていたんだから」

「そ、そう、だったんだな。そうだったんですね」

「でもね、浮気は男の甲斐性っていうじゃない。だから私は気付いてない振りをしてあげた。ずっと待ってたんだよ？ 何か関係を清算してくれるって。いつか関係を切って、私にも全部話して謝ってくれるって」

あ、あわわ。ちよつと待ってええええええ!!

ば、爆弾だあ!!! 響ちゃんがこの鎮守府最大の爆弾だったあああああああ!!!

「なのに。ドンドン浮気相手が増えるってどういうこと提督?」

「……」

「提督は変態さんだけど、私はいっぱい我慢したよ？ ウオツカの瓶を使いたいとか言い出した時は、痛いだけで全然気持ちよくなかったけど、私は我慢して提督の好きにさせてあげたよ?」

コツ、コツ。

響は無表情のまま、ゆっくりと提督へ歩を進める。金剛さんや神通さんも、響ちゃんから発せられるあまりに凄まじい威圧感に、冷や汗を垂らし後ずさりしている。

「提督は、響の何が不満だったのかな？ ねえ、教えてよ」

そう言いながら、目の光を消して笑う響ちゃんを見て。私は生まれて初めて、恐怖による失禁と言うモノを体験した。

「ふ、ふええん。こ、怖かった」

「はわわ、響お姉ちゃんが、響お姉ちゃんが大人の階段を……!?!」

——響ちゃんの目から光が消えた後。

私はそつと気を失った雷ちゃんを背負い、暁ちゃんや電ちゃんと共に部屋の外へと脱出した。

無理。これ以上、あの場に留まるのは無理。

「……ねえ、暁ちゃん電ちゃん。その、聞いてもらって良いですか?」「な、何を?」

「——私の歓迎会、もう要らないです」

今日は、とんでもない一日だった。

だけど、今日が終われば明日が来る。明日には、あの艦娘たちと共に敵と戦いあう日々が訪れる。

まあ、つまり。

「着任した日に申し訳ないのですが、異動願いを出させてもらいます」「英断なのです」

そんな日々は、願い下げである。事情を大本営に報告して、しかるべき人事異動を行ってもらおう。ここは戦場なのだ、こんな修羅場状態の鎮守府でロクな戦果が上がるもんか。

こうして。

私のトラック泊地での日々は、初日にして終わりを告げたのだった。事情を報告した後、人事の再編成が行われ、私は別の鎮守府に配属されることが許可された。その後、この鎮守府がどうなったかはよく知らない。

風の便りでは、あのクソ提督は平等に5等分され、提督だった5つの肉塊はそれぞれの艦娘の所持品となったのだとか。

真偽は分からないが、私にはどうでもいいことだ。ただ、愛すべき

第六駆逐隊の四姉妹がトラウマを植え付けられていない事だけを祈ろう。

とんだ修羅場鎮守府に着いてしまったものだね

○月○日。

今日、僕は訓練生を卒業し。人類の敵、深棲戦艦と戦う最前線、カレー泊地へと赴任することとなっていた。

「時雨。初めての遠征はどーだった？」

「うん。……少し、雨が降ったね」

「いや、降ってなかったが」

最初の任務は、鎮守府の正面海域の哨戒。遠征とは名ばかりの散歩のような任務だ。

旗艦はベテランの軽巡洋艦、天龍。滅多に敵は出てこないから安心しろ、と彼女は笑って勇気づけてくれた。

……所謂この任務は、僕のオリエンテーションと言う奴なのだろう。

「降っていたさ。そう、僕の心に、一抹の不安という小雨がね」

「お、おう」

初めての实战。僕の心は不安で一杯だった。

訓練所の的しか撃ったことの無い僕が、いざ動く敵を前にしていつも通りに狙いを定められるだろうか。本当に敵に撃たれ負傷したとき、冷静さを失わず動くことができるだろうか。

「でも大丈夫。止まない雨は……無いから」

「またキャラの濃い奴が入ってきたなあ」

この不安ばかりは、自分で乗り越えるしかないのだろう。経験を積み自信をつけて、確固たる強さを手に入れるしかない。目の前の天龍さんの様に。

「今回の旗艦はオレだ、だから遠征完了の報告に行くのはオレの仕事」「うん」

「だが、駆逐艦だけで遠征に行くことだってある。その時も、やはり旗艦が報告に行かなきゃいけねえ。だから、今日はオレについてきて報告の仕方も覚えておけ」

「ありがとう、天龍さん」

そんな頼りになる天龍さんについていき。僕は提督の待つ執務室に向かつて歩く。

「ノックを忘れるな。提督は結構、礼儀作法に厳しいからな」  
「うん」

まだ、数回しか言葉を交わしていない提督。その印象は日本男児を絵にかいたような人で、鋭い目付きに彫りの深い顔、豪々に蓄えた髭が歴戦の将を思わせる。

本音を言うと、少し怖い人だと思った。

「ノックは何回？」

「4回だ」

トントントントン、と天龍が扉を鳴らす。僕はごくり、と緊張し生唾を飲み込む。

「……反応ねえな。居ないのか？」

「でも、中から声がするよ？」

「ドアの隙間から、少し覗いてみるか」

そう言うと、天龍は目を細めて扉の隙間を注視した。それにならつて僕も、さりげなく中の様子を窺うと。

提督が北上大井の前で土下座していた。

「何やってんの!？」

「あー、天龍じゃーん」

「時雨も、こんにちは」

思わず、僕達は部屋に飛び込んだ。

そこには確かに、強面の歴戦司令官が綺麗な姿勢で土下座しており。そんな彼を養豚所の豚を見るような目付きで蔑む2隻の重雷装巡洋艦がいた。

「いやお前ら何やってんの!?! 提督は何してんの!?!」

「口で説明するより見た方が早いわね。天龍、机の上をご覧なさい」  
大井にそう言われ、つられて僕も机の上を見ると。

荘厳な執務室の机の上には、所謂雑誌が散乱していた。それも、明らかに教育に悪い肌色の本ばかりが所狭しとぶちまけられている。

「え？ あわ、わわわわっ?! な、何でエロ本が!?!」

「これ。全部提督の私物だつてさー」

「ば、馬鹿か!?! 提督、まさか執務室でエロ本読んだのか!?!」

「ち、違う!! 俺は断じて、職務中にそんな不埒なことはしていない!!」

顔を真っ赤に染め上げて、大声で提督を詰る天龍。その様子に焦った提督は、慌てて弁明を始めた。

「誤解だ、誤解なんだ! これは俺の私室においてあるモノで!」

「いや、机の上に散乱してたじゃん。私達が報告に入った時」

「いつもノックしろつて言ってたのは、こう言うことだったのね。

……キモ」

その提督は見苦しくも必死で弁明を続ける。だが、執務室の机にエツチな本を散乱させている時点で何を言っても説得力はない。

僕の中で、提督が厳しそうで怖い人からただのエロ親父に変化した。

「違うんだ……確かに、これらは俺の物だが。本当に、そう言うのじゃないんだ」

「この状況、どういふのであつても提督の評価は変わらないと思うけどねー」

「……文月なんだ」

提督は、すっかり悄気返り、小声でボソボソと、見苦しく言い訳を始めた。

「文月が何だつて言うのさ」

「文月は、良い娘だな。忙しい俺を助けるべく、何かお手伝いできる事はないかと朝尋ねてきてな」

「それがエロ本と何の関係があるんでしょうか」

じい、と汚物を見る目で大井が提督を睨む。確かに、その話とエロ

本になんの関係が――

『文月はお掃除が上手なんだよ』

『そうか。文月は良い子だなあ』

『だからね、あたしが提督のお部屋、お掃除してあげるね』

『そうかそうか、ありがとう――はっ!?!』

『じゃあね』

「……うわあ」

「純粋な文月にこんなもの<sup>エ</sup>を見せる訳にはい<sup>本</sup>かない。俺は慌てて、文月が掃除道具を取りに行っている間に危険物<sup>エ</sup>を<sup>本</sup>鞆に詰め込んで執務室に持ってきたんだ。そこまでは良かったんだが……」

「エロ本をどこに隠そうか迷っている間に、私達が報告に来て今に至る訳ね」

「ほんと、キモいんですけど」

成る程。善意の暴力とはこの事だろうか。きっと文月は幼く純粋だから、成人男性の部屋にこういったモノがある事を知らないのだろう。

「お前らに不快な思いをさせたことは謝る。だが、後生だ。お願いだからこの事を黙っていてくれないか」

「……どーしよっかなあ♪」

「提督という仕事には、ある程度威厳が必要なんだ。こんな情けない噂が飛び交えば仕事に支障を来す。それに、うちの鎮守府には多感な艦娘も多い。あまり、彼女達を混乱させたくない」

「……」

「大井の言う通りだ。俺は気持ちが悪いだろう、怖いだろう。きっと、俺の指示を嫌がり出す娘も居るはずだ。後生だ、この事はお前らの胸にしまっておいてほしい」

そう言つて、提督は土下座を決めた。ぷるぷると羞恥に震えつつも、真摯に僕達に頼み込んでいる。

これは、どうするべきだろうか。

「お、男がエロ本持つてるくらい気にすんな！」

「天龍？」

そう答えたのは、天龍だった。顔を真っ赤にしながらも、何とか笑顔を作って天龍は話を続ける。

「事情は分かった、そりやしようがねえ。文月に悪気もねえし、提督もエロ本見せつけたかった訳でもねえ。こりや単なる事故だろ」

「……天龍」

「オレは気にしねえし、誰にも言いふらすつもりはねえ。なあ、北上大井。お前らはどう思う？」

天龍は、黙っておいてあげる心算らしい。ま、確かに男の人がこんなモノを持つているなんて、半ば常識である。提督が進んでセクハラまがいの事をした訳でもない。

情状酌量の余地は十分にあるだろう。

「……私は、その」

「ふふ、ぶつちやけ私はエロ本にかこつけて提督をからかいたかっただけだし。そろそろ許してあげよつか大井っち」

「え？ ……き、北上さんがそう言うなら」

北上、大井の二人もそれで良いようだ。なら、新入りである僕も先輩に倣うとしよう。

「時雨も、それで良いか？」

「安心して、提督。不幸の雨は、いつか止むさ」

「この子日本語喋ってるの？」

「また、キャラが濃いのが入ってきたね」

「これは了承ととって良いのか？」

むう。少し詩的な表現をただけじゃないか。

「ただね？ 最後に一個だけ質問させてほしいなあ」

「何だ北上」

こうして、提督エロ本事件は大団円を迎えた————かに見えたのだが。ニヤニヤと笑みを崩さぬ北上が、からかうようにエロ本の山の頂点を指差して。

「その、エロ本の山の頂上に置かれている……JKなんちゃら？　つて本の表紙の娘」

提督に見せびらかすかの如く、手に持ってその本を突きつけた。「大井つちにそっくりなのは何で？」

見れば。その本の表紙でセクシーな怪しい服を着て笑う胸が丸見えの女性は、どことなく大井さんに似ているのであった。

「……」

「えっ？　えっ!？」

大井は顔を真っ赤にして、首をぶんぶん振っている。

「この質問に答えてくれたら黙っておいてあげる」

「偶然だぞ」

「そういうのは良いから」

「偶然だぞ」

一方で提督は真顔だ。これ以上辛い状況があるか、と言いたげな苦難の顔だ。

御愁傷様です。

「エロ本の事、言いふらしちゃおっかなあ」

「ごめんなさい俺の趣味です」

「えっ、えっ、ええっ!!」

「罵倒プレー、かあ。マニアックだねえ」

「お願いだからもう勘弁してください」

とうとう、提督から泣きが入った。

顔を真っ赤にして、沈黙する大井。心底愉快と言った表情で、エロ本を片手に提督をからかう北上。やれやれといった態度で、事態を静観する天龍。

「もう、その辺にしとけ北上」

「ぷっくくく、そうだね。ごめんごめん、からかいすぎたか」

「そのっ提督っ……、それは、それは困ります！」

「いっせ殺せ」

だがその時、僕は。僕だけは、気付いてしまった。

気付いてはいけない事に。気付かなければ良かったことに。誰も口に出さなければ、きつと平和だったとある事実。

「……ねえ、提督」

「時雨まで、何だっというんだ!」

「いや。……その、大井さんのエロ本の下のさ」

「私のエロ本じゃないわよ!」

そう。先ほどまで大井さんのエロ本に隠れて見えなかった下に隠されていた、もう一冊のエロ本のタイトル。

僕には、その表紙が目映ってしまったのだ。

「ロリロリ……天国? その本の表紙……、文月ちゃんに似てないかい?」

提督は再び地面に正座しました。

「これは……ダメだろ」

「これは……ダメだねえ」

「キモい。いいえ、キモいという次元を超えてグロい」

「また……雨が降って来たね」

大井に似たエロ本くらいならギリギリ許せる。でも、文月ちゃんは駄目だろ。絶対に駄目だろ。

「この本の表紙の娘が、文月ちゃんに似ているのは何で?」

「俺の……趣味です」

「流石にドン引きだよ提督」

言い訳しないのは男らしいけど、だからと言ってこれはない。提督は子供にすら性欲を向ける野獣だと分かってしまった今、僕は提督に嫌悪感しかない。

「これどうするんだ？ 憲兵さんとかに通報するか？」

「本部に入電でいいんじゃない？」

「許してください……許してください……」

「此処まで下手に出てる提督は初めて見るわね」

地面にめり込むんじゃないかと思うほど、提督は頭を地面に擦り付けている。でも、どれだけ土下座しようとも提督の評価が覆ることはないだろう。

「文月の身が心配だから、憲兵に連絡するのは確定で」

「私たち艦娘全員で結託して、この男を更迭しなければストライキを起こすと本部に迫りましょう」

「良いね。それくらい強く言えば、きっと本部も動いてくれるさ」

取り敢えず、一刻も早く通報せねば。提督はロリコン。僕自身、身の危険を感じている。

すると、提督は頭を下げたまま。涙声になり、ゆっくりと言葉を発した。

「すまなかった……。俺は万に一つでも、お前たちを傷つけたくなかったんだ」

大の男が泣きじゃくり、土下座をしたまま話している。その異様な光景に動揺し、天龍さんの電話の手が止まった。

「美人、美少女ぞろいの鎮守府で男は俺一人だ。提督が性欲のコントロールを失敗すると、それはそれは悲惨なことになる。それで、この間一つ鎮守府が崩壊したらしい」

「……」

「認めるよ、俺は異常性癖者だろう。だが、そういうのを抜きにしてもお前らが大切なんだ。万に一つでも、傷つけることがあっちゃいけないんだ。だから、そんな本を沢山集めていた」

「提督……」

「俺を通報するのも、更迭するのも受け入れよう。……だが、怖がる娘がいたらいけない。どうか、俺が去った後も爪痕を残さないよう、俺の異常性癖については胸にしまっておいてほしい」

そう言うと。ポタポタと涙を執務室の床にこぼしながら、提督は声

を絞り出した。

「後生だ」

そ、そこまでされると少し同情する気になってくる。

「ど、どうするよ」

「……まあ、実際誰にも手は出してないみたいだしねえ。ちよつとドギツイエロ本くらいならまあ」

「事前予防は大事よ北上さん。文月ちゃんに危険が及ぶ前に更迭したほうが……」

「また、風が変わったね」

「時雨、こうしてみると結構面白いなコイツ」

だが、文月ちゃんに危険が及ぶのは避けたい。今は性欲を自ら律しているようだが、やがて堰を切ったかの様に暴走したら目も当てられない。

「あ、面白いの見つけた」

「何、北上さん」

ところが、ここで北上が、また新しく何かを見付けたようだった。

彼女が興味深そうに手に持っている、そのエロ本のタイトルは。

『純和風おさげっ娘の大胆露出』、この表紙の娘は時雨にそっくりじゃん」

「うえ!?!」

どこことなく、僕に雰囲気良く似た娘が裸コートでVサインをしているエロ本だった。

「ねー提督、このエロ本の娘は何で時雨に似ているの?!」

「今日配属されると聞いたからな。予習だ……」

「予習!?!」

何だそれは!?! この提督は頭おかしいんじゃないか!?!

「予習って何!?! 何でわざわざ着任初日に僕に似た娘のエロ本用意しているの!!」

「あ、時雨がちよつと素出てる」

「作ってたのか、あの不思議キヤラ」

「多分、今日は時雨似のエロ本を楽しむつもりだったんじゃない？  
一番新しいし」

「うわあああああ!？」

この野郎！ ちよつと同情する気になっただらこれだよ!! 何で配属したその日に僕似のエロ本が用意されてあるのさ!!

「これあれだな。下手したら全員分のエロ本用意してんじゃねえか」

「つまり、天龍のもあるってことだね」

「てか見つけました。この『激チヨロ眼帯オレっ娘を騙して』、これ天龍でしょ」

「誰が激チヨロだコラア!!」

次が大井が持ち上げた本には、眼帯を着けた髪の短い女性が喘いでいる写真だった。天龍さんと雰囲気こそつくりである。

「私のはどこかな。つと」

「どうした北上」

「……」

「え、どうしたの北上さん!？」

そう呟き半笑いでエロ本の山を掻き分けていた北上。だが、突然に彼女の顔が凍り付いた。

「提督、男もイケるの……?」

「……ああ」

そんな彼女の手に握られているのは、同性愛本。

北上は、濁り切った眼で『本格的、海軍筋肉祭り』を手にもってペー  
ジをめくっていた。

「ま、許してやるか。文月だけ狙ってる訳じゃなくて、単に全員分の似たエロ本用意してるだけっぽいしな」

結論として、提督はこの鎮守府に所属する艦娘のほぼ全員分を用意していた。見つからなかったのは、北上似のエロ本くらいである。

「滅茶苦茶に気持ち悪いわ」

「てか私に似たエロ本だけなくない？」

これには、一同苦笑いである。どんだけ性欲旺盛なんだ、この男は。文月だけに偏執的に興味を持つてる訳じゃないんだな」

「男まで対象範囲とか……」

「……エロ本に関しては何も黙っておいてあげるけど、僕には今後仕事以外で話しかけないでね提督」

「ああ、分かった」

エロ本を収集する趣味は、正直気持ちが悪いくけど。提督は実際に誰かに手を出したり、セクハラまがいの事をしている訳じゃない。

今回は見逃してやろう。僕達は、話し合いの末そう決断した。

「提督、最後に質問。何で私のエロ本だけないのさ」

「北上は趣味じゃないからだ」

「ようし。砲雷撃戦、いくよー」

「落ち着け北上」

若干1名、唯一エロ本を用意されてなかった北上の額に青筋が浮かんでているが。

「それより、そろそろエロ本隠そうか」

「お、あんなどころにシユレッダーがあるぞ。あそこに隠せばよくないか？」

「名案だね」

シユレッダー程、このゴミを隠すのに適した場所は無いだろう。

「許してください。時雨のはまだ未使用なんです」

「じゃあ僕の本からだね」

「ぎゃああああ!!!」

僕は無表情で『純和風おさげっ娘大胆露出』を粉微塵に粉碎した。満面の笑みで露出とか痴女じゃないか。

その後、意気消沈した提督の前で淡々とエロ本をシュレッダーにかけていき。残りは数冊、となった状況で事件が起きた。

「た、大変です提督!! 元帥閣下が抜き打ちで視察にいらっしやいました!!」

「な、何だと!!」

そう。

不幸にも、軍規の弛みを予防するため時折行われる『元帥自らの抜き打ち視察』が今日行われたのだ。

「今日視察されるのは洒落になってない!!」

「おい、急げ!! 急いで残りのエロ本も隠せ!!」

「シュレッダーかけてる時間無いよ!! この量なら取り敢えずクローゼットに突っ込んでおくれ!」

「それでいい!!」

提督と艦娘が執務室でエロ本を囲んでいる図など、元帥にバレたら軍法会議モノである。

間もなく元帥が執務室に来るらしく、一同は慌てて身嗜みを整え敬礼し待機した。

「どれ、失礼するよ」

やがて。渋い声色と共に、執務室のドアがノックされる。

「わざわざお越しいただき光栄であります、元帥閣下! 一同、敬礼!!」

「はっ!」

ギイと音を立ててドアを開き、老齢の筋骨隆々な偉丈夫が部屋に入ってきたのを見て、僕は最敬礼をとった。目の前にいるのは海軍の最高責任者である。少しでも無礼を働けば、即座に解体されてもおかしくない。

「突然訪ねてきてすまんね。近頃は、少々提督に任じられたものの風紀が乱れておつてな？ 抜き打ちで視察させてもらっているのだ」

「はい、大変嘆かわしい事です閣下」

「確かに、艦娘達は非常に美人である。若い男が食指を動かされるのも致し方ないと言うもの。だがしかし、複数の艦娘に同時に手を出して大惨事となった鎮守府も存在するのだ」

「聞き及んでおります。己の理性すら律することが出来ぬとは、我が同僚として実に恥ずべき思いです」

「それでだな。……まだ公式発表はしていないのだが、新たにケツコンカッコカリという制度を導入する事とした。これは交際相手——艦娘の了承を得たなら、疑似的な婚姻関係を結ぶことを許可するものだ。つまり、艦娘との結婚を合法化する第一段階だな」

「な、なんですと!!」

元帥はニコニコと人がよさそうな笑みを浮かべて、小さな小箱を取り出した。おそらく、結婚指輪が入っているのだろう。

「堂々と艦娘に交際する許可が下りれば、件の鎮守府の様な不貞行為を防ぐことが出来るだろう。それに、どうしても艦娘と結婚したいと直訴する提督も多くてな」

「閣下。艦娘は兵器であり、部下であり、戦友です。恋愛感情により結ばれるのは、軍として好ましい事とは思えません」

「む。貴殿はこの制度に反対か」

「上司と部下の区切りはつけるべきでしょうな。少なくとも当鎮守府でそのような制度が生まれてしまったら、むしろ艦娘側も困るでしょう。上司から恋愛感情を向けられては、断り切れぬものもいるかもしれません」

「……ふむ。一つの意見として受け止めておこう」

だが、ウチの提督はその制度を真っ向から否定した。ケツコンカッコカリ、か。素敵な制度だとは思うけれど、この提督に迫られるのは確かに怖いな。

「本来ならば、視察した鎮守府の提督に『ケツコンカッコカリ』用の書類一式と指輪を支給していたのだが……。君は、ケツコンカッコカリ

を希望しないのかね」

「無論です。艦娘に恋愛感情を抱いてはおりませんし、向けられても居ません。むしろ、怖がられている節があるくらいですな」

「うむ、実直なり。君はあまり、女人や色事に興味がないのだな。軍人としては、貴殿の方が正しいのかもしれない」

元帥閣下は朗らかに笑う。いえ、その人は隠しているだけで、女人に凄く興味津々です。しかも、守備範囲が半端なく広いです。

「では、私は帰るとしよう。引き続き、この鎮守府の健闘を期待するよ」

「必ず、ご期待に添いましょう」

そう言つて、提督は再び敬礼をした。その答えに満足そうに、提督はゆつくりと立ち上がる。よかった、もう元帥閣下は帰るみたいだ。あー緊張した。

「……む、いたた。すまない、クローゼットに足をぶつけてしまったか」

「……あつ」

その時、立ち眩んだのかバランスを崩した提督がクローゼットに寄りかかり、中から1冊の本がはらりと落ちてきてしまった。

まずい。あの中にはさつきまで僕達が処分していたエロ本の残りが入っている。これでは、提督のメンツは丸つぶれ——

やがて、元帥は目の前の本に気付いて手に取り。その『夜の大元帥』と題された表紙に写る、元帥しゅんにそっくりなマッチョなお爺さんのヌード写真に瞠目した。

「これは……、一体っ!!」

「俺の趣味です」

後日提督は、元帥の居る本部から滅茶苦茶離れた辺境の鎮守府に更迭された。